

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770215

研究課題名(和文)日本の大学の英語学習者に関する教師ビリーフ：英語母語話者・日本語母語話者の比較

研究課題名(英文)Teacher beliefs about English language learners at Japanese universities: Comparing English L1 teachers and Japanese L1 teachers

研究代表者

下 絵津子 (SHIMO, Etsuko)

近畿大学・総合社会学部・准教授

研究者番号：90364190

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本の大学の英語教師を対象に学習者に関するビリーフを調査し、英語第一言語(母語)話者教師(ETs)と日本語第一言語(母語)話者教師(JTs)の間で比較した。質問紙(予備調査と本調査を含む)とインタビューを調査方法として採用した。収集データによると、学生の態度、能力や動機づけなどに関して、ETsとJTtsの間に相違点が見られた。その背景には、授業の目標スキルや内容が異なることやETsとJTtsの役割分担が関連している可能性が示唆される。二項対立的構図での役割分担はステレオタイプを助長する危険性がある。教員個人の特性・能力・経験を活かした学習プログラムの構築が望まれる。

研究成果の概要(英文)：This research project investigated Japanese university English teachers' beliefs about their students and compared English L1 teachers (ETs) and Japanese L1 teachers (JTts). Questionnaire surveys (pilot and final) and interviews were conducted to explore their beliefs. The data indicated that there were differences in the perceptions of ETs and JTts about their students' attitudes, abilities, motivations, and other areas. The research suggested that different targeted skills and class contents, and different roles that ETs and JTts take in their teaching contexts contributed to such differences. The role assignments in the dichotomous framework have a risk of reinforcing stereotypes. It is important to utilize individual teachers' expert knowledge, abilities, and experiences, in order to provide effective learning programs.

研究分野：英語教育

キーワード：教師ビリーフ ネイティブスピーカー 第一言語話者 母語話者

### 1. 研究開始当初の背景

言語教育・言語学習におけるピリーフ研究は学習者や教師を対象にしたものが1980年以降多数なされているが、異なる教師グループでの比較という観点での研究は非常に少ない。日本の大学の英語学習プログラムでは、英語第一言語(母語)話者(ETs)と日本語第一言語話者(JTs)が役割を分担して共通目標のもとに一つのカリキュラムを運営している場合が多い。一方、教師のピリーフが教室運営における行動の決断に対して与える影響は無視できず、異なるピリーフにより教室活動の成果が異なってくる可能性が指摘される。そのために、最終的なカリキュラムの目標達成度も影響を受けると考えられ、教師ピリーフの探求は教育分野において非常に重要な位置を占めるといえる。

本研究では、日本の大学で英語を教えるETsとJTの大学生英語学習者についてのピリーフを比較し、相違点を検討することで、英語プログラム向上に不可欠な両者のスムーズな協力体制に役立つ情報を提供することをその特徴の一つとして掲げてきた。

### 2. 研究の目的

日本の大学で英語を教えるETsとJTの日本の大学生に関するピリーフを比較し、相違点が見られるか、見られるならばどのような相違点でその原因・背景となるものは何かを探求した。この研究により、(1)大学英語学習プログラムに係る英語教員同士の理解を深めることにつながる、(2)教師が日本の英語学習者について理解を深めるための資料を提供することができる、(3)大学英語学習プログラム改善に役立つ資料・情報を提供することができる、と考えた。

### 3. 研究の方法

研究の方法として、質問紙調査とインタビュー調査を採用した。質問紙調査に関しては、2013年に予備調査(2013年調査)を実施、その結果をもとに本調査で使用する質問項目を吟味・用意し、本調査である質問紙調査(2014年調査)を2014年5月から8月の間に実施した。2013年調査はオンライン上で実施し、対象は大学の一学部に所属するETs11名・JT18名に協力を依頼し、そのうち6名のETs、11名のJTから回答を得た。

2014年調査は、より多くの回答を得るために紙版とオンライン版を用意し、郵送およびメールやソーシャルネットワークサービスを通じて日本全国の1000名以上の大学英語教員に協力を依頼した。その結果、合計374件の回答が集まった。分析における変数を限定するために、大学1年生または2年生の英語の授業を回答の時点で担当していることを条件としていたが、この条件を満たしていることが明らかであった154名のETs、170名のJTの回答をデータの分析に用いた。

2013年調査および2014年調査の数値デー

タは統計分析し、自由回答についてはキーワードによるコード化を用いて分析した。ETsとJTの学生に関するピリーフ(見方・認識・意見・想定・知識を含む)について相違点や共通点が明らかになり、質問紙データ分析結果をもとにその背景や原因を検討した。加えて、その検討した内容を確認し、多角的な視点から検討をさらに深めるために、インタビュー調査を実施した。

インタビューは2016年の2月から3月の間に2014年調査に参加した2名のETsおよび2名のJTを対象に行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 2013年調査の結果

2013年調査(6名のETsと11名のJT)では、以下の5点が明らかになった(Shimo, 2014a, pp. 39-40より)。

- 1) 英語学習に学生が意義を見出しているかどうかの項目について、ETsのほうがそう思わないという傾向が強かった。
- 2) 授業で英語を話すことについて学生自身が恥ずかしいと思っているとの認識がETsのほうが強かった。
- 3) 学生の発音や文法知識についての評価がETsのほうが寛大であった。
- 4) JTの大半が、学生は主体的に学ぶ機会のある授業が好きだと判断した。
- 5) ETsの大半が、学生は主に教師が説明する授業が好きだと判断した。

英語を学習する理由について、将来役立つと思うから学生は英語を学習しているとの認識を示した教師の割合はJTのほうが大きかった。就職に役立つから、あるいは卒業単位に必要なといった道具的動機づけについてはETsもJTもある程度の割合が認識しているが、将来役立つといった曖昧な思いはJTにより反映された結果となった。

授業形態に関してETsとJTで学習者の好みの判断に違いが出た点(上記の4)と5)も興味深い。ETsの授業において学習者が比較的受身的にふるまっている可能性が考えられる。

ただし、2013年調査は非常に限られた教員集団を対象になされたため、一般化は難しい。むしろ、2013年調査の意義はアンケート項目の開発にあった。2013年調査で当初設定していた探求すべき5つのポイント(教師が認識している学生の英語能力、学生の伸ばしたいと考える英語能力、学生がしたいと思っている学習活動、学生が持っている言語学習観、学生の実際の英語学習への取り組み)に加え、2013年調査で見られたETsとJT間の相違点や類似点、そして、回答において疲労効果の出ない範囲での質問数設定、日本語と英語の正確な対応性を考慮して、2014年調査の項目を作成することとした(Shimo, 2014b, p. 446)。

#### (2) 2014年調査の結果

2014年調査では、教師の学生に関する認識を問う質問項目として、以下の観点から質問を整理した。学生の性格や英語学習に対する態度、学生の英語リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング・発音・文法能力、教師やクラスメートとの英語使用についての学生の好み、教授・学習スタイルや方法についての学生の好み、学生が英語を学習する理由、そして学生がどのように英語あるいは外国語を学ぶべきだと考えるか、という点である。

調査データの分析(154名のETsと170名のJTsのデータ)によると、まず、学生の性格や英語学習に対する態度、教師やクラスメートとの英語学習についての学生の好み、そして教授・学習スタイルや方法についての学生の好みについて、以下のことが明らかになった(Shimo印刷中より)。

- 1) 両グループともに多くの教師(ETsの約44%、JTsの約半分)が、学生は「素直、指示や助言をすぐ受け入れる」あるいは「受身的」だと判断した。
- 2) 両グループとも学生が「恥ずかしがりや」「温厚」であると判断したのはそれぞれ約30%であった。
- 3) 学生が「明るい」「英語でコミュニケーションを取りたがる」「どうしたら英語力があがるかに関心がある」と判断した割合はETsのほうがはるかに高かった。
- 4) 学生が「学習に真面目に取り組む」と判断した割合はJTsのほうがはるかに高かった。
- 5) 両グループにおいて大多数(ETsの66.9%とJTsの76.5%)が、学生が英語学習に意義を見出しているかについて、「(やや)そう思う」と回答した。
- 6) 学生がクラスメートや教師と英語で話をするのが恥ずかしいと思っていると認識している教師の割合はJTsのほうが高かった。
- 7) 学生が主体的に参加する活動が多い授業を好んでいるとの認識はJTsのほうが高かった。
- 8) 学生が、教師が主に説明する授業を好んでいるとの認識はETsのほうが高かった。

上記の6)は2013年調査の結果と逆であるが、7)と8)については2013年調査の結果と同様であった。

グループ間の相違点を生み出した背景要因としては、授業における目標スキルが異なっていること、学生の教師に対する期待とその期待への教師の対応の間に存在する相互関係的状況要因、そして、授業における教師と学生、あるいは学生と学生同士の実際のやり取りの内容と量が関係している可能性が指摘される(Shimo印刷中)。

さらに、学生の英語リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング・発音・文法能力、学生が英語を学習する理由、そして学生がどのように英語あるいは外国

語を学ぶべきだと考えるか、については以下の点が表示された(注:以下は現在学術雑誌投稿中の論文にまとめている内容である)。

- 1) 学生の口頭のコミュニケーション能力について、ETsのほうがJTsよりもあると判断した。
- 2) スピーキングやライティングといった発信型のスキルを授業目標としている教師は、学生のこれらのスキルについて力があると判断する傾向が強かった。発音や文法といった部分的な能力を授業目標としている教師は、学生の英語力について低く判断する傾向があった。
- 3) ETsのほうが学生が内的に動機づけされていると判断する傾向が強かった。
- 4) ETs、JTsともに学生は外的、あるいは道具的に動機づけされていると考える教師が一定数いたが、その割合はJTsのほうが高かった。
- 5) ETs、JTsともに学生はスピーキングを伸ばしたいと考えていると認識している教師が最も多かった。
- 6) 日本語と英語間の訳の使用に関して、その価値を認める割合はETsと比べるとJTsのほうが高かった。
- 7) ETsのほうが教えるという点ではJTsよりも満足しているのではないかと推測される。学生が学びたいと思っているであろうスキル(スピーキング)を教える機会がETsのほうが割合として多いようである(調査対象ではETsの約8割がスピーキングを教える授業を典型的な授業として選んでいる。JTsでスピーキングを選んだのは31.8%のみ)。学生が学びたいスキルと授業目標が一致している点、そして内的動機づけをより感じているという傾向からの推察である。
- 8) 両グループともに、独立したスキルではなく統合されたスキルとして英語を教えるべきだという点を強調する教師が多かった。リーディングが学びの基礎となると述べた教師は両グループとも多かったが、その割合はJTsのほうが高かった。

授業において目標としているスキルの違いなど、役割の違いから認識の違いに至っている可能性があり、必ずしも第一言語が異なるために以上のような認識の違いが出ているわけではないことが示唆される(Shimo投稿中論文より)。Derivry-Plard(2013)は、母語話者と非母語話者の比較研究が、母語の違い以外の違いを考慮していないことが多いと批判しているが、2014年調査の結果からも、第一言語の違い以外の背景の違いを考慮すべきであることが指摘される。

### (3) インタビュー調査の結果

インタビューでは、2013年調査および2014年調査の結果を研究代表者が説明し、そのうえで、ETsとJTsの認識の違いなどに関する背景・原因について質問した。例えば、ETs

が学生を「明るい」「英語でコミュニケーションを取ろうとする」と判断する傾向は強く、JTs はむしろ学生は真面目だと捉えているという点について、なぜそのような違いが出てきたと思われるか、そして、学生は英語が好きだから、あるいは、英語圏の文化に関心があるから英語を学習している、と捉える ETs が割合として JTs より多かったがそれはなぜだと思われるか、といった質問である。さらには、教えるうえでの役割の違いが重要な鍵を担っていると考えられるため、自分の教えているプログラムでは、JTs と ETs が異なる教育的役割を担っているか、そうであればどのような違いか、そしてそこに利点が見られるのか、あるいは問題点があるのか、といった質問も含めた。2名の ETs (ET1、ET2)、2名の JTs (JT1、JT2) に対し、それぞれ2~3時間にわたりインタビューを実施したが、ここでは 1) 授業内容と学生の教師に対する期待、2) 授業形態についての学生の好み、そして 3) ETs と JTs の役割分担という3つの観点から報告する。なおインタビューは ETs には英語で、JTs には日本語で実施したが、ET1、ET2 の英語の発言は研究実施者が日本語に訳したものをここでは使用する。

#### 1) 授業内容と学生の教師に対する期待

まず、学生の性格に関して、授業の内容や学生がもつ教師のイメージが関係している点が指摘される。ETs が学生は明るい、JTs は学生は真面目だという印象が多かったことについて次のようなコメントがあった。

ET1: 教える授業によるかもしれませんが。自分の経験では、大学では、日本人教師はコミュニケーションの授業を担当しないんですよ。これまでの経験では、たいてい英語の母語話者が担当しています。この大学が日本人は教えられないと決めていることは非常に残念なのですが。私は青い目をした白人だから教えられる。コミュニケーションは楽しくわくわくするもの、話をするわけですから。学生は冗談も言いますし…。

JT2: ET の先生と JT の先生と学生さんメンタリティーをスイッチしていると思いますね...彼らはアメリカの文化にさらされているので、この先生にはうちとけてじゃれついていいんだという考えがあつて…

ET1 は ETs が学生に姓ではなくしたの名前で自分のことを呼ばせることが一般的である点も、教師と学生間の親密さを深め、そのために、授業での学生の反応が明るくなっている可能性も指摘した。「日本人」がコミュニケーションの授業を担当できず、そこに人種差別的な要素がある点は ET1 や JT1、JT2 とのインタビューにおいても言及されたことである。

なお、JT1 が教える英語プログラムでは、「ネイティブ」という言葉を排除し、教員の採用においても英語母語・日本語母語を採用の基準としていない。実際、このプログラムでは ETs でも JTs でもない英語教師が大多数を占めており、トルコやフィリピン出身で英語も日本語も母語ではない英語教師の授業に対する評価が非常に高いという。そのプログラムにおいても、10年以上前に「金髪のネイティブの先生」ということで履修希望者がアジア系の韓国人英語教師よりもずっと多かったことがあったという。

JT2 は、ETs が英語圏の文化や歴史の話をした場合と、JTs が同様の話をした場合で、日本人学生は全く異なる反応を示す可能性を指摘した。JT2 は学生の自学自習オンラインツールの開発に携わり、現在 JT2 の英語プログラムの学生はそのツールを授業単位履修につながる形で利用しているという。その学習ツールに、英語のリスニングやリーディングといった技能だけではなく、文化や歴史に関する項目を設けているという。それに対して学生が、英語の学習とは関係ないからその部分の取り組みを成績に反映させるのはおかしいと不満を述べるという。ところが、ETs がそのような話を授業ですれば、「同じ話をして学生は食いつきが違う」という。

JT2: 日本人学生さんは僕らと感覚を共有しているから、どうせ海外旅行行って見てきたのを喋ってるんだっていう話しにどうしてもなってしまうんですね。生まれてこの方英語圏で生まれて育った人の話というのは興味の持ち方の度合いが全然違うと思いますよね。

JT2 は、上記のような学生の反応に関して「残念なのは日本人より白人がかっこいいんだというのが少し作用している」と考えると言い、「英会話への憧れから白人への憧れにつながっている」という点を挙げた。

動機づけについては ET2 も、ETs はその出身背景を考えると、クラスでは自分の文化に関することを扱うことが必然的に多くなるであろうから、そこで学生が文化に興味を示していると判断する機会が増えるのではないかと指摘した。

ET2: ETs はそういったもの...たぶん学生の文化的な生活において新鮮で面白いことを教えているかもしれないですね。学生に話して聞かすことができるそんな文化知識を持っているわけですから、そしてそれを提供することによって学生が自分の文化への興味を高めているなどということを実感することができる。でも...日本人の先生はたぶんもっと純粋に...文化的なトピックには焦点を当てないでもっと語学教育そのものを(しているのではないかと)

なお、ET1 は、学生が内的動機づけされていると判断した割合が ETs のほうが高かったことについて、実際には表面的なところに過ぎないのではないかと意見している。つまり、英語が好きといっても「チョコレートが好きという感覚と同じようなもの」で、授業のなかでは学生は明るく元気に反応するが、授業外では英語の力を付けようとしてしっかり努力する学生は多くはないという印象を持っているという。

## 2) 授業形態についての学生の好み

英語を専攻している学生を教えている ET2 は、自分の学生は一般的に主体的に学習しており、キャリアのなかで英語を活用していきたい、そのために高度なレベルの英語力を身につけようとしていると評価した。

一方、英語関係の専攻ではない学生を対象に教えている ET1 は、学生は必ずしも主体的に活動することに慣れていないということを示す。枠組みはあくまで教師が決めて、そこで学生が活動する、という教え方を取っており、学生自身が活動するという形ではあるが、それを学生が主体的に行っているとはいえないと説明した。

JT2 は、JTs のほうが学生は主体的な活動が多い授業形態を好んでいると判断した統計結果について、「自分の劣等感の表れなんじゃないかと思う」と話した。学生主体の授業をしないといけないと頭では分かっているが、実際には学生の力を活かしきれていない、ということだ。「周りで応用言語学畑の研究者もどんどん増えていますし、いわゆる授業を行う訓練というのを専門的に積んでいるような先生も非常に増えていますし、大学英語も実用的な英語をと言っていますので、いわゆる旧来型の授業をしている人はほとんどいないと思います。思いますが、実際に授業を見てみたら、ああこんなものか、という授業ではあるかと...」という説明が続いた。

授業形態については、教師の試行錯誤は続くものであろう。ETs、JTs とともに、授業への取り組みの姿勢を複雑に反映した結果が統計データに表れていると考えられる。実際の授業がどのようになされているのかについてはさらなる研究が必要である。

## 3) ETs と JTs の役割分担

前述のとおり、JT1 の所属するプログラムはすでに ETs、JTs という枠組みを取り括っている。ただし、過去にはその枠組みがあり、ETs がスピーキング、JTs はリーディングなどスキルによる授業分担が決まっていた。しかし、教師が個別に持つ特性が活かされないということ、そして差別的なネイティブ至上主義からの脱却を目指して現在の形になっている。

ET2 は英語専門の学部には所属しているが、そこにおける JTs と ETs は雇用体系から異なっており、それが国籍によるものなのか、あ

るいは資格によるものなのかは今回の調査では不明である。

JT2 のプログラムでは、高度なレベルやライティングの授業を ETs が担当することが多いが、それ以外には特別に ETs と JTs で区別はしていないという。文化的な背景知識提供という点で ETs が、文法面などの説明において JTs が担当するなどの役割分担を明確にしていくことも重要ではないかと指摘する一方で、「自分のポジションをこなしていれば十分ということで協力関係が薄くなる。全体を見渡せる人が少なくなるというデメリットはあると思う」という。

ET1 は ETs はコミュニケーションの授業、JTs はリーディングの授業といった役割分担が強いられるプログラムにおいて、そのような役割分担は欠点しかない、という。「しっかりと資格があるのにコミュニケーションスキルを教えることができない JTs。ETs についてはきちんと資格がないのに大学で教えている。この大学ではないけれど、そんなことが実際ありますよ。」役割分担に何か利点があるかとの問いには、「(大きなため息)ステレオタイプを助長したいなら...でもそれは欠点でしょう...外国人のほうが X ができる。外国人は日本社会では偏見の目で見られる。この英会話文化...」と話した。

ETs と JTs という基準で役割分担をする大学英語プログラムでは、ネイティブ至上主義を助長してしまう可能性は否定できない。ET1 が指摘した「英会話文化」とは、白人性やネイティブスピーカーを商品化する日本の英会話産業(久保田 2015)を指していると考えられる。JT2 が説明する英会話への憧れと白人への憧れの相互作用とも重なり、外国語 = 英語 = 白人の言語という誤った意識づけの一端を担っていると批判もされよう。

## (4) まとめ

本研究を通して ETs と JTs の学生についての認識に相違点や類似点が見えてきた。教室の前で目の前にしている英語学習者に関する認識をより深く、多角的な視点から理解を深めることは、より効果的な学習環境の提供に必要である。固定化された概念で学習者について判断をくだしてしまうことで、学習者の学習達成度を左右してしまう可能性(ピグマリオン効果・ゴーレム効果)があるからだ。また、ステレオタイプや、しいては人種差別的なイメージを助長して、教員各個人の特性を生かしきれない言語学習プログラムは効果的であるとはいえない。教員の役割分担や授業内容をステレオタイプから脱却し、教員個々人の特性・能力・経験を重視して役割や授業内容を決定していくことが学習プログラム改善に必要であろう。

インタビューでも指摘されたように、母語話者が生まれ育った文化的背景の文化知識の提供者として歓迎される側面はある。しかし同時に、現在の世界での英語の使用状況

を考えると、非母語話者の英語使用率は高まり、英語使用者の文化は英語母語話者の文化圏と一致する状況ではない(Honna & Takeshita, 2013)ことも考慮すべきである。

Derivry-Plard (2013)は日本の英語教育では、ETs はネイティブだが教師ではない、JTs は教師だがネイティブではない、という批判を受け、二項対立的構図の中でどちらのグループも不利益を被っていると指摘し、また、教師・学習者が個別に持つ能力や経験を十分に活かすべき多言語的な要素を含む言語教授・学習環境を構築することの重要性を唱えている。英語学習プログラムというと、目標言語が英語という一つの言語だけであり、そこに言語的多様性は見られないとの批判もある。しかし、「世界の英語」や「国際共通語としての英語」という概念がそのような状況の打開に役立つと考えられる。

ET1 の英語学習プログラムのように多様性を重視し「ネイティブ」という観点を排除したプログラムの効果も今後注視したいところだ。様々な英語の変種に接する機会を提供することで言語的多様性を促進することができ、また教師の母語に係らず、二言語以上を身に付けた英語教師を採用することで、多様な言語・文化環境づくりを支援することもできる。「世界の英語」「国際共通語としての英語」という概念とこれらを基軸とした英語学習プログラムの効果についてさらなる研究を進めたい。

#### <引用文献>

Derivry-Plard, M. (2013). The native speaker language teacher: Through time and space. In Stephanie Ann Houghton and Damian J. Rivers (Eds.) Native-speakerism in Japan: Intergroup dynamics in foreign language education (pp. 243-255). Bristol: Multilingual Matters.

Honna, N. & Takeshita, Y. (2013). English as an International Language and three Challenging issues in English language teaching in Japan. In R. Marlina and R. A. Giri (Eds.) The pedagogy of English as an international language: Perspectives from scholars, teachers, and students (pp. 65-77). Cham: Springer.

久保田竜子 (2015) 「余暇活動と消費としての外国語活動 楽しみ・願望・ビジネス英会話を考える」『グローバル化社会と言語教育 クリティカルな視点から』(久保田竜子著、奥田朋世監訳) くろしお出版 (pp. 91-114)

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Shimo, E. (2016). English teachers'

perceptions of students' personalities and attitudes: comparing Japanese L1 and English L1 teachers. 『近畿大学総合社会学部紀要第4巻第2号』 pp. 35-55. (査読無) <http://id.nii.ac.jp/1391/00014219/>  
Shimo, E. (2014a) "Teachers' Beliefs about English Learners at Universities in Japan: A Review of Previous Research and Findings from a Pilot Study" 『近畿大学総合社会学部紀要第3巻第2号』 pp. 31-48. (査読無) <http://id.nii.ac.jp/1391/00013470/>  
Shimo, E. (2014b) "Exploring Japanese university English teachers' beliefs about their students: Questionnaire development and implementation." *The Proceedings of CLaSIC 2014*, 441-450. (概要査読有) [http://www.fas.nus.edu.sg/cis/CLaSIC/clasic2014/Proceedings/shimo\\_etsuko.pdf](http://www.fas.nus.edu.sg/cis/CLaSIC/clasic2014/Proceedings/shimo_etsuko.pdf) 訂正: 2014年調査について、p. 449に"a total of 294 teachers participated"(合計294名の教員が参加した)と書いたが、約370名と修正が必要である。

[学会発表](計4件)

Shimo, E. "How do Japanese-university English learners look to you?"全国語学教育学会奈良支部会、2015年10月4日、やまと会議室(奈良県奈良市)

Shimo, E. "Exploring Japanese university English teachers' beliefs about their students' characteristics"大学英語教育学会第54回(2015年度)国際大会、2015年8月29日、鹿児島大学(鹿児島県鹿児島市)

Shimo, E. "Exploring Japanese university English teachers' beliefs about their students"第6回言語研究センター国際大会(CLaSIC)、2014年12月4日、シンガポール国立大学(シンガポール)

Shimo, E. "English Teachers' Beliefs: A Review of Previous Research and Findings from a Pilot Study"大学英語教育学会第53回国際大会、2014年8月29日、広島市立大学、(広島県広島市)

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

下 絵津子 (SHIMO, Etsuko)

近畿大学・総合社会学部・准教授

研究者番号: 90364190

(2)研究分担者: なし

(3)連携研究者: なし